

金子スミ子さんと原田正純先生

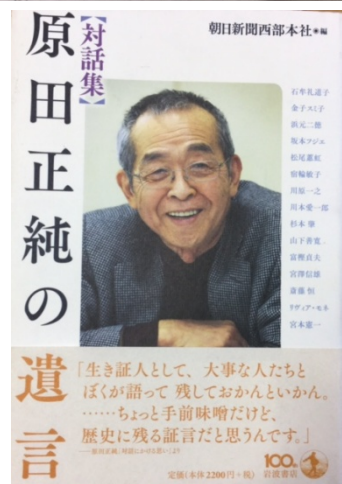
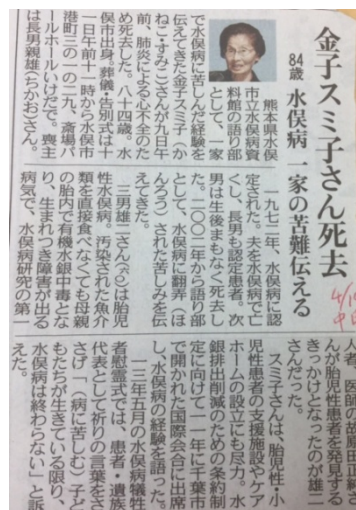
写真の中日新聞 4月10日朝刊によると、熊本県水俣市立水俣病資料館の語り部として、一家で水俣病に苦しんだ経験を伝えてきた金子スミ子さんが9日午前84歳で死去した。「三男雄二さん(60)は胎児性水俣病。汚染された魚介類を直接食べなくても母親の胎内で有機水銀中毒となり、生まれつき障害が出る病気で、水俣病研究の第一人者、医師の故原田正純さんが胎児性患者を発見するきっかけとなったのが雄二さんだった。」

この記事を読み、『原田正純の遺言』の原田先生と金子スミ子さんとの「対話」を思い出した。原田先生は「金子さんは実感として、知っていたんですね。」うちの子は水俣病ではないって言うけど、それなら、何だ“と

「対話集」冒頭から。

◎熊本大学医学部の大学院に在学中の1961年、金子さんとめぐりあったのは、原田さんにとって「運命の出会い」だったと聞いています。

原田 水俣の明神におんなさった患者さんが寝たきりで、「病院まで連れて来れん」ということだったから、若手のわれわれに「往診に行ってくれ」と言われたんですね。昭和36年ですから、あのころは車も何もなくですけん、とぼとぼ歩いて行って診察をして、帰りよったら、近所の家の縁側で兄弟が遊んでいてね。「二人とも水俣病ですね」と言ったら、おかあさんが「おにいちゃんは水俣病だけど、下の子は違う」と言われたんです。思わず、「どうして?」って訊いたら、「どうしてってありますか。大学病院の先生がそう言いよるじゃないか」って怒られちゃってね。なんで怒られるか、わからんですよ。そうしたら、「上の子は魚を食べて水俣病になった。下の子は魚を食べておらん。おなかにいたわけだから、生まれつきだ」と。ぼくは納得したわけですよ、「ああ、なるほど」と。水俣病というのは魚を食って起こるんだから。そうしたら、おかあさんは全然、納得しなくてね。「わたしの食べた魚の水銀が、この子に行った」と言うわけです。当時、「胎盤は毒物を通さない」というのが医学の常識だったからですからね。「そんな、ばかな」と思ったんですけど。「主人も水俣病で死んだ。いっしょに同じものを食べたけど、わたしは症状が軽い。それは妊娠しておったから、わたしの食べた水銀はこの子が取ってしまったんだ」と。それが金子さんだったんですね。



(2016年4月12日)